

許して話せる相手がいない、間違っただけには正してほしいこともある、といった声もよく聴く。スタッフと親たちとの関係でも、しばらくやり取りがあると意外と早く仲良しのような関係になることもあるが、そのときにもう一步深い関係となっていく為には、どこか間を持ち、ぶつかり合いもしていかななくてはならないときもある。そこへ至るには長い時間や信頼関係、タイミングのとり方など、経験を積まないと難しい部分も多いが、突き進むだけでなく、一度立ち止まって考えてみる必要があるときもある。

③特別な援助を必要とする人たち

子育ての支援は予防的な役割が重要であるが、実際にひろばでの活動をしていると、深刻な相談が持ち込まれることも多々あるその際には相手の為を思い、がんばって対応をするが、すべて自分(達)で抱えてしまうことはできれば避けたい。

i チームで取り組む

一人で抱えてしまうということは、一人だけの考えで判断をしてしまいがちで、「私のケース」といった雰囲気を生みだしてしまう。また一生懸命してあげればしてあげるほど、依存的な傾向に拍車をかけてしまい、将来的に状況を悪化させてしまう場合もある。必ず複数でケースの検討をし、互いの意見を交流させる必要がある。一人では見えてこなかった点が必ず他の人から出されてくるはずである。理想的には外部のスーパーバイザーがいればよいが、そうした状況をつくるのが難しい場合も多く、まずスタッフ内できちんと検討し、必要であれば他機関との連携を持ち、実際にそちらへ行ってもらうということだけでなく、スーパーバイズをしてもらうという関わり方もある。

ii ケースマネジメント

他機関とかかわるということは単に紹介をするということではない。気をつけていきたいのは、あくまでも違う機関に

行く事を決めるのは本人の意志であり、私たちはその援助をする立場だということである。「ここに行って下さい」ということではなく、「こういう選択肢もあるけど、どうする?」という立場で、決定する為のいくつかの課題を共に考え、援助していくことが必要なのである。例えばカウンセリングにしろ家庭相談や婦人相談にしろ、受けたいと思っているのだが、どうも不安で踏み切れない、それに子ども連れでは行けない、お金のことも心配。といったことはよくあるケースだが、公共の施設で無料相談を開催している場合もあるし不安であれば、こちらから問い合わせをし、様子をきいてみたり、初回は付き添って行くこともある。子どもに関してはベビーシッターやファミリーサポート、一時保育等があったり、緊急であればスタッフが一時的にみるといったこともある。もちろん出来る範囲内のことでだが、なるべく決定を助けるような援助が必要なのである。そのときには社会資源についての情報を持っていることが大前提となるので、公共のもの、民間のものあわせて幅広く子育てや生活全般にかかわる情報を集める必要がある。またそうした資源を創り出していくことも支援者の大きな役割である。地域組織化、人材育成等地域づくりの視点も忘れずにもってきたいことのひとつである。

もちろんそれら無責任に紹介するわけにはいかないの、きちんとしたネットワーク作りが重要になってくる。逆に一つ一つの事例を丁寧につないでいくことで実のあるネットワークが作り上げられるということもある。

④完璧な援助者はいない

みずべではスタッフ研修としてノーバディズ・パーフェクトプログラムの体験を取り入れているが、それぞれが親の役をやりながら、ファシリテーターを交代で務め、ファシリテーターとしての役割を学んでいる。面白かったのは役になるといっても自分の体験や経験が反映され

ることもあり、自分自身についての理解を深めたり、スタッフ同士の理解が深まったという思わぬ副産物があった。“みずべ”のスタッフについても一人ずつの事例を多く出したが、当然みなよい面がありながら課題も抱えている。「ノーバディズ・パーフェクト」にならい、完璧な親もいないように完璧な援助者もない。まずそうした謙虚な気持ちをもちながら活動していくことが大切である。

※1 子育て支援はじめの一步、小学館、新澤誠治：参照

参考文献

私の園は子育てセンター、新澤誠治、小学館

地域から生まれる支えあいの子育て、小出まみ、ひとなる書房

子育て支援と NPO、原田正文、朱鷺書房

第55回日本保育学会論文集「親子の生活の見直しとその援助」今井和子・新澤誠治他

カナダ保健省 子ども家庭リソースセンター編 向田久美子訳 「ノーバディズ・パーフェクトシリーズ」ドメス出版

IV 子育て支援研修プログラム

1. 研修プログラムの目的と作成方法

つどいの広場等子ども家庭や子育てを支援する活動が各地で広がり、多数の人々（スタッフ、サポーター、ボランティア等）が支援活動に携わっている。これら支援者たちは多種多様なバックグラウンドをもっており、資質、経験や知識、技能の程度もまた多様な人々である。一方でいま「ひろば」に求められているのは親の育児不安を軽減するだけでなく、親自身が子育てのなかで楽しみや喜びを深く経験しながら、親も子も成長し、そのことがまた自分たちの暮らし（地域）のなかに還元され、子育ての力を培っていくような支援のあり方である。そこで地域に密着したひろば型の支援が多様な可能性をもつものとして注目されている。

ひろば型の支援とは「施設」を中心に、情報、もの、技術を提供する従来型の援助ではなく、それぞれの地域性、独特の文化に根ざして、地域住民・親子が主体的に活動を創り出していけるような援助をめざしている。

このような社会的なニーズに対応してひろば機能を十分に果たすために、支援する側の組織的、体系的な研修システムを構築していくことが必要であると考える。

1) ひろば型支援者の育成

「ひろば」の環境は、理念、人、場所、時間、活動という大きく五つの要素からつくられていると思われるがその中で、もっとも重要なリソースは人（人材）である。理念を具現化し、望ましい活動に繋げるのは人であり、場を提供するだけでは、ひろば版の公園デビューが発生しかねない。スタッフ、サポーターなどが有能な見守り役、ファシリテーターとして機能しているかどうかひろばの質や評価を左右する。

平成 14 年度に行なった我々の調査の

結果によると、運営主体や組織の規模によって支援者の位置づけに非常に差が認められる。地域子育て支援センターや規模が大きい施設では、常勤・有給の保育士が専任スタッフとして配置されているが、その他の多くの施設では少数の常勤スタッフを中心に非常勤・無給もしくは有償の、数名から数十名のスタッフがローテーションを組んでいる。また特に資格要件を問わない施設でも保育士や元保育士など保育に関する専門性を有する多くのボランティア・スタッフがひろばの支え手となっている。「つどいの広場事業」関連の施設の場合も資格要件が緩やかであるので、就労経験や子育て経験者、子育て当事者など、対人的な専門性に限らず多様な資格や能力をもった人々が支援者として携わっている。

このように一口に支援者といってもそのバックグラウンドは種々さまざまであるが、子育て支援活動は今後ますます複雑化、多様化し、それらに対応した支援職としての専門性が求められることが推測される。人材育成は時間を要するものである。現在、支援者として活動している人も、これから活動を始めようとする人に対しても中・長期的な見通しをもって研修システムをつくっていくことが望まれる。研修プログラムもそうした実践の一環として位置づけている。

ひろば型は、基本的にノンプログラムで、「ひろば」での過ごし方は参加者それぞれの自主性に委ねられる。スタッフ、支援者はノンプログラムで、形が見えにくい分、親が自発的に自由に楽しんで活動できるような環境を準備しなければならない。審判的にみたり介入するのではなく、まず関心をもち共感的に受けとめ必要なときに声をかけられる見守り役であり、また親子がさまざまな人々との関係の中で自らの力で成長できるようにファシリテートする援助職でもある。このような支援者としての専門性が求められてきている。そこで、ひろば型の支援者の育成を目的とした研修プログラムを作成

し、実践的試行をする。

2) 支援者研修に関するニーズ調査

研修プログラムを作成するに当たって「子育て支援者に関するアンケート調査」(巻末資料)及びヒヤリング調査を行い、地域の乳幼児を育てる家庭、子育て支援の場実際に携わっている支援者が、子育て支援や支援者のあり方等についてどのような考えをもっているのかを分析検討し、その結果を踏まえてプログラム作成を試みた。

(1) アンケート調査の対象

全国つどいの広場連絡協議会の関係者にアンケート調査を依頼し、郵送により回収したが、回収率は20%弱と極めて低い。有効回答は35名である。

事業形態で最も多いのは集いの広場(49%)、次いで子育てサロン(14%)、地域子育て支援センター(11%)、子ども家庭支援センター(9%)で、その他(20%)である。

支援者としての立場は、保育士(46%)、幼稚園教諭(11%)、栄養士(6%)、保健師(3%)、看護師(3%)、その他(31%)で、さまざまな背景が窺える。

経験年数1年未満は僅か14%で10年以上(17%)、1年以上5年未満(34%)、5年以上10年未満(34%)と経験年数は高い。

(2) 支援者に求められる資質・技能

① 子どもの発達支援

大きく2つの要素が挙げられている。一つは、専門的な知識・技能、一つは支援者個人の資質・経験である。前者では、基本的な知識として、子どもの発達や障害についての基本的理解と遊びやおもちゃ・絵本の知識等が求められている(23%)。また具体的な支援技術として、子どもの発達・成長を促進させる発達援助的な関わり方が求められている(35%)。後者では、支援者個人の子育て経験(7%)や、それらの経験に依拠すると思われる子ども理解や援助の姿勢・態度(35%)が求められている。

② 親への対応

子どもへの対応と同じ傾向であるが、さらに強く援助職としての専門性が求められている。とくに基礎的な知識より支援者の姿勢・態度(48%)と具体的な技術(35%)に重点がおかれている。受容、共感、カウンセリングマインド、グループワークの技法等、カウンセリングの基本姿勢や援助技術が求められている。

③ 相談への対応

相手の話をよく聴く、聴き手としてのカウンセリング的スキルと同時に、ひろば相談の範囲かどうか、問題の本質を見極め、抱え込まずに専門家・専門機関へつなげていくための力量が求められている。

④ 家族の問題への対応

家族の問題に遭遇したとき子育てに関わる相談の一環として対応する、そのための援助技術が必要とされる点で、③に準じる傾向であるが、その他、プライバシーに立ち入らない聴き方や守秘義務、虐待や離婚DVの専門機関との連携等が取りあげられている。

⑤ その他必要なこと

支援者自身の自己管理の問題、支援者同士の連携・ネットワークの問題、ネットワークシステム構築のための地域理解や国の施策理解、目指すひろば像の再確認の作業等が多く取りあげられている。

⑥ 必要と思われる研修内容

最も多いのは、基本的知識・技術に関するもので、上述の①～⑤の中でほぼカバーされるものであるが、子育て支援の動向、ファシリテーションの技法、「うつ」の理解、20歳代の母親の心理価値観、バーンアウト防止の研修、幼児向け救急法等、具体的な内容もあがっている。その他事例研究や、支援事業のマネジメントに関する研修の必要性に言及している。

(詳細は巻末・相馬の分析レポート参照)

(3) ヒヤリング調査

ひろばや子育てサロン、育児サークル等の支援者にはファシリテーションの技法が必要であり、講義型の研修でなく参加型学習方法により支援者自らが体験的

に学ぶことが必要であるという認識から支援者研修の課題が話しあわれた。

2. 研修プログラムの作成と実施

「ひろば」のスタッフや支援者を対象とする研修プログラムの基礎編として、3日間・5コマ・12時間半の『ひろば型ファシリテーター養成講座』プログラムを立案・作成し、約40名の現任の支援者およびボランティア等支援者予備軍に実施した。

1) 研修プログラムのねらい

「ひろば」におけるスタッフや支援者は、それぞれがファシリテーターであるという認識と力量をもって「ひろば」の活動に参加できるように、支援者としての自分自身の資質・技能の向上をめざしている。

ひろば型ファシリテーターとは、ひろばに参集するさまざまな価値観をもっている人々を繋ぎ、親子に安心して安全な場を提供し、一人ひとりの成長と同時に参加者全体、またひろば全体の成長をファシリテートする役割を担う人（促進人）である。研修プログラムは、このようなひろば型のファシリテーターの養成を具体的な目標としている。

①参加型学習方法を通して体験的に学ぶことの意味を理解する。

スタッフや支援者として、親と対等な立場にたち、指導者でなく援助者として、また共に学びあう人として、親や子どもに関わるとはどのようなことか、まず自らも一人の参加者としてグループ学習に参加し、他者の話を真剣に聴くこと、話すということ、共に在り共に学ぶということ等の体験を通して、深く理解する。

②支援者としての相談・面接力のスキルアップをめざす。

ファシリテーターはカウンセラーではないが、カウンセリングマインドをもち、日常的な場面で活かせることが望ましい。ひろばの相談活動のなかでは、多くの子

育ての当事者や先輩経験者がそのリソースを活かして中心的な役割を担っている。このような個人的な資質や経験に根ざしていると思われる援助者としての特性や姿勢・態度は、ニーズ調査でも明らかかなように支援者に求められる重要な条件となっている。社会的なニーズはさらに複雑化、多様化してくることが予想されるなかで、個人的なリソースを土台にしつつ、援助のための基本的な知識や技能を十分に身につけ現実の生活場面で柔軟に応用できるように、また自分の力量を超えた問題に遭遇したときに適切に判断し、専門家・専門機関に繋げることができるようにカウンセリング的な援助理論や技法を学ぶ。

③支援者の自己理解を深める。

子育てとは個育てといわれるが、子どもを個として自立させることは親自身もまた子どもとの関係を通して個として自立した、親としてのアイデンティティを確立していくことである。したがって子育てを支援するという事は、親が子育てを自分自身の課題としてとらえ個として成長できるようにエンパワーメントすることである。そのためには子育てサービスを一方向的に提供したり導いたりするという提供型でなく、ひとり一人が自分らしさを発揮して子どもと向き合えるように援助する見守り型の支援が望まれる。親ができることを肩代わりせず、まず親自身のリソース(資質や経験)を尊重し、必要なときに必要なだけの手助けをする、できそうなことを少し後押しをしながら自律的な力をつけるように援助していく。ひろばが常設であることや、ノンプログラムであること等はスタッフやサポーターとの援助的な関係、依存でない信頼関係を築いていくうえで促進的な力になっているとおもわれるが、支援者としてもっとも大切なことは、親や子どもに援助的に関わりエンパワーメントするためには、支援者自身も自らの心に向き合い、自らの課題を吟味し、エンパワーメントすることである。研修プログラムの作成

に当たって、もっとも大きな達成課題としたものであり目標でもある。

2) 研修プログラムの構成

ひろば型の子育て支援者のための研修プログラムの基本モデルとして作成、実践した内容を以下の表に示した。

(*印は、各回の主な内容である)

研修プログラム—学習のテーマと内容

<p>第1回： ひろば型ファシリテーターとは —ひろばの機能とスタッフの役割</p> <p>*ひろばの社会的な意味に自覚的になる。</p>
<p>第2回： 子どもへの理解と援助 —子どもへのかかわりと環境構成</p> <p>*子ども支援を行うため、子どもの視点を理解する。</p>
<p>第3回： 親への理解と援助Ⅰ —親へのかかわりとひろば相談</p> <p>*ひろばに日常的にみられる葛藤場面—子供同士のけんかに焦点化し、親・子・他児（他者）の立場を理解する。</p>
<p>第4回： 親への理解と援助Ⅱ —相談とカウンセリングマインド</p> <p>*相談に必要なスキルとカウンセリングマインドについて学習する。</p>
<p>第5回： ファシリテーターに求められるもの —支援者としての自己理解</p> <p>*感情・気持に焦点をあて、自己の感情を整理し理解する</p>

(1) 全体の構成

支援者研修に関するニーズ調査の結果を踏まえて、研修プログラムは5つの学習テーマから構成されている。1テーマに1コマ（2時間半～3時間）を当て、5コマの継続研修を想定してプログラム化したものである。

1回ごとに独自のテーマをとりあげつつ、ひろば型のファシリテーターの養成という、全体としてのテーマのなかに各テーマを位置づけて全体の構成を考えた。したがって、受講者がどのテーマの学習のなかでも、ファシリテーターとしてのマインドを自然に身につけることができるように、全体のプロセスを念頭において構成されている。

全体の学習プロセスは、その開始から終結までを、導入⇒展開⇒まとめという大きく3つの段階に分けられる。

第1回は導入期として、ひろば型支援の意義や社会的役割など外的、社会的枠組みを明確にし、支援者ひとり一人がひろばのなかで、重要な役割を担っていることを認識する、支援者としての自己覚知の段階である。また研修期間、学習を共にする仲間同士としての出会いを大切にしたい時期である。

第2, 3, 4回は研修の展開部分として、主たる課題を中心にとりあげ、援助技術の基本理論や知識が実際の援助場面での行動や気持ち、接遇のしかた等どのように結びついていくのか、また人的環境を含めてひろば環境との関わり等を実践的に学ぶ段階である。

第5回は、研修の最終回として、それまでの研修のまとめとふり返りをする。支援者としての自己理解という、個人の内的理解を深める段階として研修プログラムの核心部分でもある。

(以上、プログラムの構成については、研修プログラムの実践に際して講師を担当した、伊志嶺、大豆生田、田島、大豆生田（千夏）、櫃田の合議の上で、全体の枠組みを決定した。)

3)実施方法

3日間5コマ12時間半の『ひろば型ファシリテーター養成講座』として実施したもので、その内容に基づいて述べる。

(1) 対象

子育て支援に関心のあるもの及び、現在子育て支援をしているものを対象に参加者を募り、継続参加できないものも含めて延べ40名が受講した。この中、23%がボランティア等支援者予備軍である。

(2) 実施期間

2005年1月～2月、3日間とも土曜日。第1回・2回(1日目の午前・午後)、第3回・4回(2日目の午前・午後)、及び第5回(3日目の午後)の連続講座を組んだ。所要時間は第1回～4回は2時間30分、最終回の第5回を3時間とした。

(3) プログラムの進め方

前項で述べたようにプログラム全体の構成は、導入⇒展開⇒まとめ(終結)という学習プロセスを考慮してつくられている。このような学習プロセスは、各回の実践の中でも大切にしたい視点である。基本的には、以下のようになる。

導入	(例) プログラムの紹介 *前回の振り返り *グループ分け *アイスブレイカー 等 ↓
展開	(例) 各テーマの学習 グループワーク *ロールプレイング 等 ↓ *リフレッシュメント ↓ 各テーマの学習 グループワーク ロールプレイング 等 ↓
終結	(例) まとめと振り返り グループ討議・まとめ *学習後の自己評価 次回の説明 等

各回の進め方は、基本的なプロセスは概ね同じであるが、学習のテーマ・内容に沿って実践者の裁量に委ねられた。

時間の配分も重要な要素である。あらかじめ設定していても参加型の体験学習の場合、時間通りに運ばないことも起こりがちであるので留意したい。

その他留意事項(*)について述べる。

- 前回の振り返り：
毎回終了時に行なう「振り返りアンケート」の結果を参考にして、質問への回答や振り返りを行う。前回の理解を補うと同時にウォーミングアップとしても意味がある。
 - グループ分け：
日常とは異なるグループ体験や、支援者同士の多様な出会いの機会を提供できるようにグループの編成のし方を工夫する。
 - アイスブレイカー：
新しい出会いの場面で互いに緊張を解し、グループ学習を円滑に進める上で役に立つアクティビティである。参加者の状況に応じて柔軟に考えてよい。
 - ロールプレイング：
体験的学びの方法として研修場面では有効なアプローチであるが、課題や構成メンバーによってさまざまな行動ををひきだす。終結のタイミングに注意を要する。
 - リフレッシュメント：
息抜きのためのごく短いティータイム、やトイレ休憩を少しでもとった方が望ましい。
 - 学習後の自己評価：
学習の振り返りとして毎回終了時に行なう。受講者、実践者双方にとって有効な工程である。
- (4) 実践後のフォローアップ
実践終了後に、研修の成果が現場でどのように活用されているかをフォローするまでが研修プログラムと考える。

3. 研修プログラムの実際

1) 第1回『ひろば型ファシリテーターとは』 ーひろばの機能とスタッフの役割ー

◆ ねらい・目標

- ① 子育て支援やひろばとは何かについて概論的に理解する。そこでの支援者とは、何をするのかなどを理解する。
- ② ファシリテーターとは何か。どのような人でどんな存在かについて、ワークを通してイメージを作る。

◆ 学習内容

6人ほどのグループで着席。

① オリエンテーション

5回講座について、内容や予定について簡単に紹介、参加を動機づける。

② アイスブレイカー

初めて出会う人たちが多くことから、「私の好きな○○」の○○をグループごとに決め、それを加えて自己紹介を行なう。その人らしさが出て近親間が沸き、緊張もほぐれやすい。

③ 子育て支援とは

日本の子育て支援のこれまで、少子化対策として始まった両立支援から次世代育成支援までの概略を学ぶ。子育て支援者とは何をするのか、したいことを考えてみる。

④ ひろばとは

子育て支援の中心的存在「ひろば」とは何か、その機能についてビデオのカナダのドロップインを参考に学ぶ。施設のハード面のイメージを作り、ソフト面について、ノンプログラム、ノンジャッジメンタル、エンパワーメントなどの理念を学ぶ。

⑤ ファシリテーターとは？

まだなじみの薄い言葉、「ファシリテーター」の意味や働き、機能を知る。場を促進する人、参加しやすい安全な場をつくり人と人をつなぐ役割、グループの力動を見守り発展させる役割を持

つ、支援を必要とする人にとっての伴走者であることを学ぶ。

⑥ ファシリテーターとして動く

ファシリテーターの役割を体感する活動。二人1組で話をあまりしないで、一方が自由に動く人として歩き回り、他方がファシリテーターとしてその人に寄り添って歩く。役割を交代して同じことを繰り返す。好きに動く人とファシリテーター役の体験をそれぞれ話し合い、相手への好ましい寄り添い方について考える。

⑦ ファシリテーターの役割を考える

このセッションのテーマであるファシリテーターについて、理解したことを話し合う。どのような役割を持ち、どのようにふるまったら良いのかなどを、これまでの経験からも考えてみる。

◆ ふりかえり

5回講座の第1回。30名ほどの受講者が5グループに分かれ、アイスブレイカーや動くワークを交え、くつろいだ雰囲気です2時間半、子育て支援の概論とファシリテーターについて学んだ。

受講者のふりかえりからは、ひろばで何を提供するのか必要かがあまり考えられないでいるが、ファシリテーターが必要で、育成と研修が継続的に必要と思った。ぼんやりながらファシリテーターの概観が見えた。実際に動いてみてファシリテーターの必要性とともに難しさも分かった。ひろばでの自分の動きがファシリテーターにふさわしくないことが良く分かった。ボランティアスタッフにファシリテーターの役割を要求するのは難しいと思う、などが書かれた。

ひろばの現場で活動していても、はっきりしなかったことが少し理解できた、そこでスタッフとして何をしたら良いか、ファシリテーターがどのような存在で、何をすることがおぼろげながら理解できたようだ。

ボランティアとして活動する支援者が荷が重い、と感じたことにも注目したい。

◆第1回プログラムの実際例

	学習のテーマ	学習の内容	時間
導 入	1) オリエンテーション 2) アイスブレイカー 「私の好きな○○」	<ul style="list-style-type: none"> ・5回講座の構成や内容について説明。 ・グループ編成で着席する。(1 gr. 6名) ・グループごとに好きな○○を決めて、それを入れて自己紹介を行う。それぞれの個性が分かり、近親感が沸き、緊張をほぐすことができる。 	25分
展 開	3) 子育て支援とは 4) ひろばとは 《リフレッシュタイム》 5) ファシリテーターとは 6) ファシリテーターとして動く (アクティビティ)	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで行われてきた子育て支援策について概論を学ぶ。 ・子育て支援者、スタッフとは、について考える。 ・ひろばの特徴、機能、施設などを知る。 ・ビデオから、カナダの家族支援やドロップインの実態を知る。 ・ドロップインのプログラムの理念や姿勢を学ぶ。 ・短いティータイム、トイレ休憩等 ・伴走者としてのファシリテーターの役割、ひろばにいることの意味を学ぶ。 ・二人1組で、自由に動く人と付き添うファシリテーターとして、2分間歩く。 ・体験し感じたことを記録する。 ・役割を交代し、同じに繰り返す。 ・グループで感想を述べ合い、ファシリテーターのあり方を考える。 ・グループ毎のまとめを発表する。 	45分 5~10分 50分
ま と め	7) ファシリテーターの役割について考える 8) まとめとふり返り	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの結果を踏まえて、ファシリテーターの姿勢等について説明する。 ・各自、ふり返り用紙に記入する。 ・次回について説明する。 	20分

2) 第2回『子どもへの理解と援助』

—子どもへのかかわりと環境構成—

◆ ねらい・目標

- ① 事例を通して、子どもの行為の意味と内面理解について具体的に学ぶ。ビデオカンファレンスの形式で行うことにより、ケースカンファレンスの仕方の基本を同時に理解する。
- ② 子どもへのかかわり方や環境構成のあり方について具体的に学ぶ。(今回の時間内では、この点については実施できていない。そのため、ここでは①のみに限定して説明する。)

◆ 学習内容

6人ほどのグループで着席。

- ① オリエンテーション
今回は子どもを理解することのプログラムであることについて説明する。
- ② アイスブレイカー
子どものテーマでもあるため、最近あった子どもについてのちょっとした微笑ましいエピソードについて話し合う。子どものユニークな姿を話しながら、なごやかな雰囲気をつくる。
- ③ 子どもを理解することの意味
子育て支援とは、親や家族を支援すること、地域の支え合いを支援すること等があるが、それと同時に子どもの育ちを支援することでもあることを理解する。その上で、親子のファシリテーター(伴走者)として、子ども理解ができることが不可欠であることを学ぶ。しかし、子ども理解は親を理解すること同様、非常に奥が深く、トレーニングを要するものであることを理解する。
- ④ 子ども理解のトレーニング
0～3歳の子どものひろばや公園などでの日常的な場面を撮影した場面をビデオで視聴する。多少、トラブルがあるなど、誰もが関心を持てるようなよくある場面が望ましい。また、あまり長い場面ではなく、5分～10分程度(長くても15分程度)のものが望ましい。

ここでは特に、ビデオに登場する子どもの内面や行為の意味を理解することがテーマであることを説明し、子どもがどのような思いでいるのか、なぜそのようにしたのかなどの視点からビデオを観る。わかりにくい場合は、もう1回繰り返し、同じ場面を観る。

- ⑤ 子ども理解の広がりや深まり
自分なりの子ども理解をグループ内で話すと共に、他の参加者の理解の仕方について聞く。他者の話を聞くことで、同じ場面であっても、その理解の仕方や見ている視点が大きく異なることを理解する。それは、全体討議の中でもさらにその違いを知る。理解の仕方の違いを通して、子ども理解の多様な視点の持ち方について理解することができる。具体的には、年齢や発達段階の違いによること、環境のもつ意味があること、他者との関係性によること、場面の前後の脈絡との関係があること、親子関係や家族関係との関連のことなどがある。話し合いの視点に広がりや深まりが生まれぬ場合は、討議の中で必要な投げかけを行う。ただし、あくまでも参加者自身の発見による理解であることが望ましい。
- ⑥ カンファレンスの方法について学ぶ
子ども理解において、ケースを仲間とディスカッションしながら理解を深める「カンファレンス」の方法が有効であることを実感的に理解する。

◆ ふりかえり

受講者のふりかえりから、自分の見方が非常に一面的であることが多く語られた。自分は子どもを理解しているように思っているにもかかわらず、ビデオを用いた方法ではないにしても、自分が見た子どもの姿のエピソードを話し合う上でもこのような方法は生かされる。この学びを通して、ひろば内のスタッフ間での「ふりかえりミーティング」などの場で生かされることが期待される。

◆第2回プログラム（子ども理解）の実際例

	学習のテーマ	学習の内容	時間
導 入	1) 第2回プログラムの趣旨と概要	<ul style="list-style-type: none"> ・趣旨と概要について説明する。 ・グループ編成で着席する。(1 gr. 6名) 	5分
	2) アイスブレイカー 「子どものちょっとした微笑ましいエピソード」	<ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに自己紹介を兼ねて、最近あった子どもについてのちょっとした微笑ましいエピソードを話す。なごやかな雰囲気を作る。 	15分
展 開	3) 子育て支援の中での子どもの育ち支援について	<ul style="list-style-type: none"> ・子育て支援は、親や家族を援助したり、地域での支え合いを生み出すことであると同時に、子どもの育ちを支援する機能でもあることを説明し、子どもを理解することの重要性を理解する。 	20分
	4) ビデオ視聴	<ul style="list-style-type: none"> ・0～3歳未満児のひろばや公園などでの日常的な姿のビデオ(5分～10分程度のもの)を視聴する。観るにあたって、登場する子どもがどのような気持ちなのかを考えてみてほしいと投げかける。わかりにくければ、2回観る。 	20分
	5) グループ討議と発表	<ul style="list-style-type: none"> ・ビデオを観て感じたことを自由に話し合う。登場する子どもの内面について、発見したことや疑問としてあげられたことについてグループごとにあげる。 	50分
	休憩 6) 全体討議	<ul style="list-style-type: none"> ・グループから出された感想や意見からいくつかの視点を整理し、全体で討議を進める。討議を通して、子ども理解の視点を多様に理解する。(年齢と発達、環境の意味、他者との関係性、この場面の前後の文脈、親子や家族関係等。) 	20分
ま と め	8) まとめとふり返り	<ul style="list-style-type: none"> ・もう一度ビデオを通して観て、自分なりの子どもの理解の仕方について再考。 ・このセッションを通して学んだことについて、各自、ふり返り用紙に記入する。 	20分

3)第3回『親への理解と援助Ⅰ』

—親へのかかわりとひろば相談—

◆ねらい・目標

- ① ひろばに日常的にみられる葛藤場面（子ども同士の喧嘩を焦点をあて、親・子・他児・他者の立場を理解する
- ② 『ひろば』の役割と親の願いへの導入として「我が国子育て環境の現状について」の調査研究資料をもとに情報を共有し、正しい親への理解を深める。

◆学習内容

①前回のふりかえり

前回の「ふりかえり」用紙に記載されている内容全体を踏まえ、今回のセッションにつなぐ為に必要と思われる事項について情報としての説明を行なった。

②アイスブレイカー

第3セッションでは、前回とグループ構成が変わっているため、アクティビティーは「子どものときの遊び」を取り上げた。年齢層や居住地域によって遊びが異なることが分り、楽しみながら相互にリラックスしつつGr.意識が育ってくるよう配慮した。Gr.にはファシリテーターによるファシリテーションを試行した。

③「ひろば」の役割と親のねがい

子育て家庭が置かれている現状について、調査資料をもとに学習し、改めて『ひろば』の役割とそのニーズの多様化について学習する機会とした。親へのかかわりと日常的な「ひろば相談」の話題をとりあげた。

④親理解のために

—ロールプレイングとグループ討議—

ひろばでよくある『けんかの場面』を取上げて、Aちゃん、Bちゃんと、その子たちの親2名、また支援者1名と観察者1名の役割を設定し演技を行った。

けんかの理由設定から、A・Bそれぞれの訴えと親の対応、支援者の立場と対応を観察者が記録し後の討論へつなげる。各々が演じた役割から親の葛藤や子どもの気持をどのように理解できたのか、双方の仲立ちはどうだったかなど等、個々に気持を述べる。

⑤報告：ロールプレイを終えてどのような気づ

きがあったか、感じたこと、問題点など、Gr.毎の発表を通して学習内容をひろげることも報告のねらいではある。

⑥ひろば相談のいろいろ

・ひろば相談とは何か

緊急を要する育児相談や悩みを電話で相談するもの、専門家のもとでなければ出来ないものも多い。これらをサポートする親支援者の存在や力量が求められる。

⑦ふりかえり

本日の研修を通して学びや気づき、またテーマの疑問・質問などから『ふりかえり』、次の講座へつなげる場とする。

⑧まとめ

第3セッションの学習は親理解への、事象を通じた学びである。本セッションは、相談に関する精神や方法（とりわけ対人的な援助職）への導入として位置付け、支援者に求められる親理解（葛藤）に焦点化した学習とした。

◆ふりかえり（反省点）

『親への理解と援助Ⅰ』は親へのかかわりとひろば相談の副題に焦点を当て組み立てた。従って、よく起こる子ども同士のとり合いや喧嘩がテーマのロールプレイを導入し、身近な問題として考えることが出来た。それ故に現在支援者として携わっている受講者には、余り日常的すぎてその対応も結果もケースバイケースとして判断できるものであったようだ。然しながら学生やボランティアである受講生には、同じグループで演習し討議したのだが、結論が見えず終わった感も有る。これは先行研究に基づき実施したロールプレイである。親の対応としての姿勢が幾つかあるのだが、今回は説明から外し参加型学習としての主体性を尊重した。参加者の質問から示唆を加える事の必要性を感じたので反省点として挙げたい。時間配分に関しては複数講師の連携があつて良かった点と思われる。

◆ 第3回 プログラムの実際例

	学習のテーマ	学習の内容	時間
導 入	1) 前回のふりかえり	・前回の本セッションに関連ある質問・事柄を取上げ、必要な情報としてのふりかえり。	10 時 開始
	2) アイスブレイカー —子どもの時代のあそび— (気持ほぐしと仲間づくり)	・新しいグループの編成 (1Gr.6 名程度)。 ・一人ひとり 1 分程度で話す。 ・グループ構成員が育った時代背景も分り話が弾む。時間内で全員が楽しめるように ・ファシリテーター (1 名) の役割を経験する (参加者による学習の展開)	15 20 分
展 開	3) 「ひろば」の役割と親のねがい ・家庭支援 ・一時保育 ・発達障害 ・親のエンパワメント etc.	・子育て家庭のおかれている*調査資料から、改めて『ひろば』の役割とニーズ多様化について学ぶ (講義)	10 時 40 分 ↓ (60)
	4) 親理解のために —ロールプレイングと グループ討議— <リフレッシュメント>	①よくある『けんかの場面』を、こども A/B、A/B の親、支援者、観察者の役割をもって演習。 ②それぞれ役割を演じた後、各々の立場から気持やしつけの問題などを取上げて話し合う。 ・講師の説明→(参加者による学習展開へ) ・ティータイム ・トイレ休憩 (短い休憩で気分転換を図る)	(10)
	5) 報告	・各グループの体験的な報告から、気づいたこと、や疑問などを共有し、学習内容をひろげる。 (参加者による参加型学習)	11 時 50 分
	6) ひろば相談のいろいろ	・ひろば仲間て解決する日常的育児上の相談ごと ・緊急に活用できる電話相談 ・発達相談や家族相談など専門家に繋げたい複雑な相談ごと(専門相談員の活用) ・それらをサポートできる親支援者の育成 (講義)	(20) 12 時 10 分
ま と め	7) ふりかえり	・今日の学習の留意点を説明する 『ふりかえり』から疑問・質問を踏まえて Gr. で話し合う (ファシリテーターとグループで討議)	(20)
	8) まとめ	・相談の精神・方法についての詳細は次講座へ	12 時 30 分

4)第4回『親への理解と援助Ⅱ』 ー相談とカウンセリングマインドー

◆ ねらい・目標

- ①ひろば型ファシリテーターは、どのような役割、責任を担っているのか、またそのためにどのような資質、知識、技能を必要とするのかを理解する。
- ②ひろば相談に必要な「よい聴き手」としての基本的な援助技術の向上をめざす。

◆ 学習内容

①前回のふり返り

「ふり返り用紙」の結果を参考にして参加者の意見や質問に答える、前回の簡単なふり返りをする等を行い、この回への動機づけを促す。

②アイスブレイカー

第4回では研修の雰囲気にも慣れ、参加者同士の関係もかなり親和的になってくるので少し複雑なものにして、この回の中心テーマである、相談とカウンセリングマインドに繋げることでできるアクティビティとして「わたしは、だれ？」を選択した。

* (写真カードの)人物・状況の設定は、プログラム実践者の創意工夫に委ねる。

③ファシリテーターの位置づけ

ひろば型では、ファシリテーターの存在が重要であるという視点から、

- ・親と対等な立場にある
- ・指導者でなく援助する人である
- ・よき聴き手であり、伴走者である
- ・場の観察者であり参加者でもある
- ・個人やひろば全体をファシリテートする

等について、具体的に考える。

④ひろば相談とカウンセリングマインド

ファシリテーターとカウンセラーの相違をあらためて確認する。その上で、カウンセリングマインドや、カウンセリング的な援助技術の必要性について学ぶ。

⑤積極的な傾聴

「よく聴くこと」について学び、また5つの悪い聴き方を挙げて、実際に考える

⑥親理解のために (ロールプレイング)

グループ内で相談事例と役割(親1、相談者1、観察者1~2名)を決めてそれぞれの立場になって演じる。役割交代して繰り返す。1回毎に気づいたことを記述しておく。

⑦グループ討議

参加者それぞれの体験、そのときの感情や考え方を言語化し、グループ内で分かち合う。グループで話し合った事柄を発表し、全体で共有する。

⑧ファシリテーターにおける留意点

全体のまとめとして、話し合いの結果を踏まえ、ファシリテーターの中で気をつけること、問題等を取り上げて説明する。

⑨「ふり返り用紙」記入

⑩次回の紹介をする

◆ふりかえり

親への理解と援助Ⅰの学習を受けてⅡでは、対人的な援助職としての専門性という側面から内容を組み立て、理論(知識)と実践を結びつける体験学習に重点をおいた。限られた時間であるので内容はもっと少なくてもよいかもしれない。

参加者の感想、評価をみると、ロールプレイングが高く評価されている。悩みを訴える親と相談を受ける人、話し手と聴き手、それぞれの役割を体験してみて、共感することや安心して話せる気持ちを実感できた、日常の相談場面で役に立つ手がかりを得た等の成果を認めているが、一方で課題に対して実際場面でどう対処したらよいか、問題解決に至らない不満も認められる。現場でさまざまな課題を抱えているであろう支援者にとって、体験の過程もさることながらどうしても解決策を求めがちである。時間配分、終結の仕方、事後のシェアリングの仕方等、実施上の配慮が必要であろう。

◆第4回プログラムの実際例

	学習のテーマ	学習の内容	時間
導 入	1) 前回のふり返り 2) アイスブレイカー 「わたしは、だれ？」	<ul style="list-style-type: none"> ・前回のふり返りをし、本セッションへの橋渡しをする。 ・新しくグループ編成する。(1 gr. 6名) ・2人一組のコミュニケーション・ゲーム。カード(人物・状況等がわかる写真)をもつ方は声をださずに話しかけに答える。聴き手は相手の非言語メッセージに注意して意図をよみとる。役割交代して繰り返す。 	20分
展 開	3) ファシリテーターの位置づけ 4) ひろば相談とカウンセリング 5) 積極的な傾聴 《リフレッシュタイム》 6) 親理解のために (ロールプレイング) 7) グループ討議	<ul style="list-style-type: none"> ・ファシリテーターとして大切にすべき視点を明確にする。 ・ひろばでの「援助」について考える。 ・カウンセリングの基本姿勢・態度について学ぶ。 ・ひろば相談とカウンセリング・マインドについて考える。 ・カウンセリング技法について考える。 ・5つの悪い聴き方をとりあげる。 ・短いティータイム、トイレ休憩等 ・カウンセリングの実際について学ぶ。 ・グループ内で身近な事例について話し合い、テーマを選択する。 ・役割：親、相談員、観察者各1～2名 ・各々体験したことについて感想を書く。 ・役割交代して繰り返す。(1回5～10分) ・グループ毎に各自の体験を話し合う。 ・グループ毎のまとめを発表する。 	45分 5～10分 50分
ま と め	8) ファシリテーティングの中で留意すること 9) まとめとふり返り	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの結果を踏まえて、ファシリテーティングの留意点等について説明する。 ・各自、ふり返り用紙に記入する。 ・次回について説明する。 	30分

5) 第5回『ファシリテーターに求められるもの』 - 支援者としての自己理解 -

◆ ねらい・目標

- ①ひろば型ファシリテーターは、対人支援者として相手を理解する前に、自身を知り、理解しておくこと、自身の課題が整理されていることが望ましいことから、自身を理解する機会とする。
- ②自己や相手の中心となっている感情、気持ちに焦点をあてて、自己を肯定し、自己肯定感や自尊感情を高める。

◆ 学習内容

①前回のふり返り

「ふり返り用紙」の結果を参考にして参加者の意見や質問に応える、前回の簡単なふり返りをする等を行い、この回への動機づけを促す。

②アイスブレイカー

この回の中心テーマである自己に目を向けるために、「好きな私、ほめたいこと」を入れて簡単に自己紹介をする。好きな自分に気づき、日頃ほめてもらうことの少ない自分をねぎらい、自己肯定感を意識する機会とする。

③相手の価値観を尊重する

ファシリテーターはそれぞれの価値観を尊重し、互いの違いを認め、否定しない姿勢が望まれる。自分の価値観も知ったうえで、決めつけない、指導しないといった姿勢について考える。

④聴く・聴いてもらう活動

ファシリテーターはまず相手の話を聴く姿勢が必要である。2人で互いに聴きあうワーク。「ひろばに思うこと」をテーマに各3分間、思いを聴きあう。聴く姿勢の6割をあいづち、3割を応答的繰り返し、1割を自分の気持ちや思いを伝えることとする。

⑤感情・気持ちを考える

人が自然に持っている感情、恐れ、悲しみ、怒り、喜び、愛などを表現する言葉を考える。うれしい、困ったときなど、

その気持ちを言葉で相手に伝える語彙をどのくらい持っているか、子どもや親の感情表現について考えてみる。

⑥感情を整理する

ワークシートを用いて、この1ヶ月に怒ったときのことを挙げ、その1例について詳しく記述し、自分がどう感じたのか、今ならどう処理するだろうかなどを考えてみる。記述することで自分の怒りの気持ちを表現し、その後の話し合いは、抱えていた怒りを整理し、納める体験となる。

⑦私たちにできること

ひろば型ファシリテーターとして、「私にできること・アイディア」を書き込む。その後、それぞれのアイディアを活かして「みんなでできること」は何かを話し合い、グループの提案として発表する。支援活動はそれぞれのアイディアと人との協力が欠かせない。グループワークに活かせる活動である。

⑧ファシリテーター役割を考える

⑦での提案、また5回に渡る学習を基に、ファシリテーター役割についてふりかえり、個人として考えたことなどを発表する。

◆ ふりかえり

5回講座の最終回。学生も交え年代、活動の場も違う受講者が5グループに分かれ、相手に対応する自分に向き合い、その感情や姿勢について考える機会となった。個人のまとめは⑦でのファシリテーターとしての提案に集約されている。

まずファシリテーター自身がひろばを楽しみ好きで、自身をケアして安定し信頼されること。しっかり聴き、寄り添う、気持ちよく迎え、見送る、一人ひとりを認め受け止め、人とつなぐなど、ファシリテーターとしての態度についてが語られた。さらにファシリテーター同士はコミュニケーションをしっかりとって、それぞれの持ち味でチームとして対応することなどが提案された。今回のテーマ「ファシリテーターに求められるもの」について、ほぼ理解されたと考えられる。

◆第5回プログラムの実際例

	学習のテーマ	学習の内容	時間
導 入	1) 前回のふり返り 2) アイスブレイカー 「好きな私 ほめたいこと」	<ul style="list-style-type: none"> ・前回のふり返りをし、本セッションへの橋渡しをする。 ・新しくグループ編成する。(1 gr. 6名) ・自分の好きなところ、ほめたいことを入れて簡単な自己紹介をする。互いに知り合い、自己肯定感、自尊感情を高める活動。 	20分
展 開	3) 相手の価値観を尊重する 4) 聴く・聴いてもらう活動 「ひろばに思うこと」 5) 感情・気持を考える 6) 感情を整理する 《リフレッシュタイム》 7) 私たちにできること グループワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・互いの違いを認め、否定しない。自分の価値観にも気づき、それを押し付けない、指導しない姿勢を考える。 ・二人組で日頃ひろばについて思っていることを互いに話し・聴きあう。 ・相づちを中心に応答的繰り返しを心がけ、後で感想をのべあう。 ・感情を表す言葉を書き出し、感情を表現する語彙を考える。 ・言葉で気持を表現する意味と、子どもや親の気持を考える。 ・自分が怒りを感じた事例について書き出してふりかえる。 ・グループで発表し、聴きあうことで自分の気持を整理する。 ・短いティータイム、トイレ休憩等 	60分 5~10分
ま と め	8) ファシリテーター役割を考える 9) 講座をふりかえる	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの結果を踏まえて、ファシリテーターの役割について考える。 ・講座全体を含め、個人のふりかえりとして発表する。 	20分

4. 研修プログラム実践の評価

1) 研修プログラム実践による受講者(支援者)の変化

—「ふりかえり」にみる受講者の意識—

(1) 研修会の回数とテーマ

総合テーマを「ひろば型ファシリテーター養成講座」とし、毎回主テーマとサブテーマを以って内容を明確化していくワークショップ形式の研修である。1セッションは2時間30分、従って全5セッションは2.5日(12時間半)を用いた。第1回から第4回までは昼食をはさんだ1日5時間の研修に対する受講者に「ふりかえり」の記入をして貰った。第5回は1セッションのみの「ふりかえり」記入である。毎回の主テーマ並びにサブテーマは次の通りである。

- ・第1回1月8日(土)午前
テーマ：ひろば型ファシリテーターとは
—ひろば機能とスタッフの役割—
- ・第2回1月8日(土)午後
テーマ：子どもへの理解と援助
—子どもへのかかわりと環境構成—
- ・第3回1月22日(土)午前
テーマ：親への理解と援助Ⅰ
—親へのかかわりとひろば相談—
- ・第4回同上22日(土)午後
テーマ：親への理解と援助Ⅱ
—相談とカウンセリング・マインド—
- ・第5回2月5日(土)午前
テーマ：ファシリテーターに求められるもの
—支援者としての自己理解—

(2) 参加者の内訳と状況

参加者受講(約40名)の所属は大きく2つに分類できた。

①現在ひろばで支援者として活動している者または保育園・保育室に所属の保育士が全受講者の77%であった。現場を持つ人たちであるゆえに全員が毎回参加するには困難があったかの状況が伺われた。「ふりかえり」にみる内容からは1回または2回の参加者がいて、また全

回出席者もいたのだが、記名がないためにその正確な追跡は難しい。

②2つの大学から応募の学生及びボランティアや支援者を希望している人、或いは施設職員や保育者養成校教員などの参加があり、約23%がこれに該当している。

受講者募集の地域がさほど広くなかったが、比較的多職種への参加があったことはこうした講座への関心が今や広がりつつあることが伺われる。

(3) 受講者の研修効果と内容の理解度

①手続き

本研修では研修日毎に「ふりかえり」用紙を配布し当日終了後に回収した。第1日(1月8日)、第2日(1月22日)、第3日(2月5日)の3回である。受講者の「ふりかえり」用紙への記入は、『学んだこと』『気づいたこと』『考えたこと』を自由記述してもらう。また受講者の持つ『今後への期待及び質問』の欄を設け、毎回疑問や希望及び自分自身への課題への記入も得られた。「ふりかえり」記入用紙の内容を毎回KJ法により分類し、受講者の反応を読み取った。

②結果

分類の結果、毎回のサブテーマの内容は「演習とふりかえり」を通して主テーマの理解をする者が多く、研修におけるアクティビティの有効性が理解された。受講者が「学んだ」内容

第1日(第1・第2セッション)では

●ファシリテーターとは何か 及び

●子ども理解とその関わりについて

第2日(第3・第4セッション)では

●親理解とひろば相談

●傾聴の意味

最終回(第5セッション)では、

●ファシリテーションと自己理解との関係性 であることが理解された。

③受講者の記録からみる学習・理解内容

i 第1日目の学習内容から

A「ファシリテーターとはなにか」

- *ファシリテーターと言う役割を学んで、子育て支援などと構えず人との触合いを楽しみ、謙虚に接していくこと
- *相手が思いを言葉とし出してくれるのを「待つ」こと。自分が判断しないという難しさ
- *何も分らず参加したが何となくファシリテーターの外観が見えた。ロールプレイは人間関係全般を考えさせられる
- *回を重ねて理解が深まるとの期待

B. 演習からの子ども理解と気づき

- *思春期二人の子どもを育てているが、子どもでも大人でも人に向き合うこと、結果は本人が決めるのを待つこと。
- *支援の意味が押付けや助けでなく、相手の気持ちに寄り添うこと、ファシリテーターは日常生活の場にも実践がある
- *社会に子育てや子どもの大切さをここから発信してゆき、社会と繋がること。
- *ひろばの雰囲気や環境の安全の確認。
- *カナダ・ドロップインの良さに近づきたい。

ii 第2日の学習内容から

A. 「親理解とひろば相談」の意味

- *子どもの物の取り合いでは、ファシリテーターの役割の大切さが分った
- *ママ友達の関係を失わない為に目先のことで子どもを叱り謝らせている
- *答えを求められると感じた時、先輩として沢山の助言が頭の中を過ぎるが..
- *親が持つ本来的「力」を信じること

B. 「傾聴の意味」

- *相談は、解決ではなく聴いて貰う聴き手の姿勢の大きさにあること
- *解決する事ではなく受け止めてもらうことの大切さを知った
- *グループワークでは、参加者の発言に気づきが生まれる
- *ロールプレイは大嫌いだが学びも多くファシリテーターを分り易く学習できた。

iii 第3日の学習内容から

A. 「支援者としての自己理解」

- *自分自身を肯定し自信を持って人と向き合うということ
- *自分自身が健康であること大切さ
- *答えは一つではなく、相互の違いを認

め合うことから生まれる

- *怒りの整理は新しい事へのパワーとなるということ
- *保育士としての仕事内容のみでは狭いことに気づいたこと
- *感情を自覚し言葉を持ち、表現する相手をもつことの大切さ
- *様々な価値観をもつスタッフやひろば利用者とは、今後コミュニケーションづくりを大切にができそう

④講義や研修の技法から

- *演習前の講義が具体的であると、その後の演習や学習に取り組み易い
- *模造紙を使って個々の思いを書き出したことは、自分気持ちの整理に繋がった
- *個々の感情や思いを抽出し、後に全員の考え方(共通する気持ちや・意識)を引き出す手法は今後用いたいもの。

⑤全体からの評価と考察

A. 支援現場にある受講者の理解内容

以上、数多い学習者の肯定的記述である。支援の現場を持つ経験者の多くは、自身の現場を重ね合わせて新しい理解の深まりを表明していることが伺われる。然しながら継続的な参加が出来なかった一日または半日の受講者の場合には、当日プログラム中の内容を学習し理解することは可能だが、企画全体からの一貫性ある学習には至っていないと考えられる。つまり、今回は子ども理解、親への理解そして自己理解への背景として、「ひろば型ファシリテーター」養成が主テーマであることから、何れの回に参加してもそれなりのファシリテーション・マインドの理解が可能であったのではないかと考えられる。『質問や今後への期待』の記述には、既に提示された問題の提起が重ねて示されたことから理解できることであろう。未だ正式な支援者研修プログラムの確率されていない現状からは、今回のような成人教育の手法を用いたファシリテーター養成講座は、一つの「研修モデル」として位置づけたい。

B. 学生やボランティアの理解内容

支援現場を持たない学生受講者の場合
i 「講座の全てを自分に吸収したい」との表明や真摯な参加態度は、演習場面でグループメンバーから好評を得ていた。

ii 第3セッションにおける『子ども同士の喧嘩』のロールプレイで、対応はケースバイケースではあるが「支援者のありかたについて」或いは「誰が対応に当たったら良いのか」などの基本的な理解を求める「ふりかえり」の記述がある。

これらは支援者予備軍の素朴な学習意欲と理解し、その場で学習グループへフィードバックするなり、今後の研修に生かすヒントとしてとらえたい。

iii 今後「自分には傾聴の姿勢が必要」とは、保育ファシリテーターを志向する者としての新しい気づきと理解できる。

iv 「ひろばの様々な事象をリアルな問題としてとらえられたこと、現場の方々との話が聞けたことは、大変参考になった」等など、支援の場を持たない所謂予備軍である学生やボランティアたちには、授業では学べない実践からの理解が、今後自らの学習や研究視点を生む事につながっていくのではないかと考察した。

(4) 個々の変化を明確にするために

今回用いた「ふりかえり」記入を分類する手法は、一人ひとりの理解と全体意識を把握するには良い方法と考えている。然しながら連続性の中での変化をとらえるには不足があることに気づく。今後は以下の点から検討してみたい。

① 受講者の自己点検並びに自己評価の観点から評価尺度を添付する。

② 連続性の中で変化をとらえるには、ふりかえり用紙には記入者の署名が望まれる

(5) 研修の実りをひろばへ届ける

一ひろばファシリテーターとして、私たちにできること、みんなにできることー(Gr.毎に模造紙に自分のアイデアを一人ひとり「私にできること」とし書き込む。記入後ディスカッションしながら、Gr.の

共通点を抽出し『みんなで出来ること』を模索し報告したもの)

★みんなで、できること

*一人ひとりを大事にしながら人と人をつなぐ

*来られない人への配慮

*環境づくり *雰囲気

*笑顔で接する

*待っている気持ちをさり気なく、ことばや態度で示す

*信頼される態度で安心して過してもらう

*人の話しを受止め、心を聴く

*じっくり話しを聴く

*話したいと思ってもらえるファシリテーターになる

*支えあっていることを言葉でなく伝えていきたい

*違いを認め合い、スタッフ同士のコミュニケーションをしっかりと持つこと

*自分自身がひろばが大好きであること

*自分たちも楽しむ

*共通の目指す目標雰囲気

*参加者を気持ちよく迎える、見送る

*ひろばに関わる人、皆のきもちに添う

*一人ひとりを認めてあげる。いろいろでイイヨ。

*日頃来られない人への配慮

*心地よい場所に(ひろばにかかわる人、みんなの気持ちに寄り添う)

素直、誠意に対応

☆ファシリテーター自身のケアも必要

☆何かあったときの対応

☆安定している状態で

◆ ☆に示したものは、ひろばの危機管理の問題、ファシリテーター自身の精神保健と自己管理を示唆しているものが読み取れる。グループ討論の中では、親のエンパワーメントに資するファシリテーターの姿勢、また学生ボランティアを通じた世代間交流もその視野に入っていることが伺われる。

以上